

岳参り

屋久島島民は、集落によって、春か秋、あるいはその両方に、聖なる山々への巡礼を行う伝統があります。岳参りとして知られるこの毎年の慣習は、500 年ほど前に始まったと言われています。集落の代表者は、仏の化身である山の神、一品宝珠大権現に、五穀豊穡、豊漁、家内安全を祈願します。各集落には独自の巡礼の儀式やルートがあります。これらは通常、外側の山々である前岳の一つに登った後、宮之浦岳、永田岳、栗生岳といった、内陸にある奥岳のより高い峰々の一つに登るというものでした。今日では、いくつかの集落はルートを簡略化し、前岳を登るだけにしています。

起源

1480 年代後半、屋久島で地震が頻発していた時期に、仏教の日蓮宗の僧であった日増上人が永田岳の岩屋で七日間過ごし、そこで法華経を唱えました。以来、揺れが感じられることがなくなったと言われています。それ以降、土着の神道の神である彦火火出見命（別名：山幸彦）は、一本宝珠大権現の化身として崇められ、岳参りの道中に点在する祭壇や石碑には後者の名が刻まれています。このように、岳参りでは神道と仏教の両方の神々が崇められており、六世紀半ばに中国から仏教が日本に伝わった後に仏教と融合した神道の一例となっています。

現代の巡礼

岳参りは、以前は三日二晩の儀式でしたが、車が利用できるようになったことや、地域の過疎化や高齢化などの影響もあって、年とともに縮小され、一日の行事になりました。屋久島の 24 の集落のうち約 20 の集落では、今でも岳参りの儀式が行われており、選ばれてこの行事に参加することは、村人にとって名誉なこととされています。最大の集落である宮之浦では、春と秋に岳参りが行われています。参加者は午前 3 時 30 分に益救神社で巡礼の安全を祈願した後、車で一品ヶ浜に向かい、櫛（*Cleyera japonica*）の枝を使って清めの儀式を受けます。その後、竹の容器—長さ 10 から 15 センチ、直径 3 から 4 センチほど—に、波で清められた砂浜の砂を満たします。この砂は山の神々に捧げる海の塩を象徴していると言われています。午前 6 時頃、白い法被と円錐形の竹で編まれた笠（彼らを登山者と区別し、また彼らの悟りの追求を表現するために着用されるある種の制服）を身にまとった参加者は、片道八キロメートルの宮之浦岳山頂へと出発し、一品宝珠大権現が祀られている、洞窟の中の小さな祠を参拝します。参加者は前述の砂のほか、塩、米、焼酎などの海や田畑の恵み、また神に捧げるお金を持って行きます。参拝のスタイルは一般的に拍手などの神道式ですが、全員で祈りを唱えるといった仏教的な要素も入っています。

集落神社、もう一つの参拝場所

益救神社は 1,000 年を超える歴史を持つ屋久島の神社の本山で、島の神社の中心的存在です。宮之浦集落内というその立地のため、山頂の祠に比べて参拝しやすい場所になっています。益救神社は、仏教の神、一品宝珠大権現とも呼ばれる彦火火出見命をはじめ、山と海の七つ神を祀っています。山のふもとにある神社なので、巡礼の時だけでなく、島民は一年中山の神々に祈りを捧げることができます。大晦日のお祭りでは、善と悪の神々の戦いを象徴する 和太鼓の演奏が行われます。十二月 31 日には宮之浦岳から善の山の神が村に降りてきて、人々から悪霊を追い出すと言われていますが、悪の神に邪魔されてしまいます。舞台の中で振られる火のついたたいまつは、どのような悪魔も人々から浄化することができる善の神の勝利を象徴しています。